

～重症熱性血小板減少症候群（SFTS）患者の発生について～

- 3月6日、県内で、今年初めての重症熱性血小板減少症候群（Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome:以下「SFTS」という。）の患者が確認されました。（全国では、今年5件（3月1日現在）が報告されています。）
届出対象となった平成25年3月以降の県内の発生は累計で36件です。
- SFTSは、SFTSウイルスを保有するマダニに咬まれることで感染するといわれ、感染予防策としてはマダニに咬まれないようにすることが重要です。
- 気温も高くなり、これから12月頃までは、マダニの活動時期となります。森林や草地などマダニが多く生息する場所に入る場合には、長袖、長ズボンを着用するなどマダニに咬まれないよう十分な対策を講じて下さい。袖やズボンの裾に隙間ができないよう、できるだけ肌の露出を少なくするよう注意してください。
- 屋外活動後は、入浴などを行い、マダニに刺されていないか確認してください。

<患者の概要>

- (1) 患者
男性（66歳）、天草市在住
- (2) 職業
会社員
- (3) 症状
発熱、全身倦怠感、血小板減少等
- (4) その他
ダニの明らかな刺し口なし
- (5) 経過
2月中旬：山林にて山菜等を採取。
2月下旬：体調に異変が生じる。
3月3日：症状が継続したため、天草保健所管内の医療機関を受診し、入院。
医療機関でSFTSを疑い、天草保健所を通じて、県保健環境科学研究所に検査を依頼。
3月6日：県保健環境科学研究所でSFTSであることを確認。
3月8日：患者の体調は回復傾向にあることを確認。

■重症熱性血小板減少症候群（SFTS）とは

- ・重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、マダニに咬まれることで感染し、6～14日の潜伏期間を経て発症し、発熱、消化器症状、リンパ節腫脹、出血症状などを伴います。致死率は6～30%とされており、治療は対症療法となります。
※マダニは、衣類や寝具に発生するヒョウダニなどの家庭内に生息するダニと異なり、主に森林や草地に生息、全国的に分布しています。

■ダニ媒介性疾患の予防対策

- ・今回確認されたSFTSはダニ媒介性疾患の1つです。
- ・ダニ媒介性疾患の感染予防対策としては、ダニに咬まれないようにすることが重要であり、以下の点に注意して下さい。
 - ① 森林や草地などマダニが多く生息する場所に入る場合には、長袖、長ズボン、足を完全に覆う靴などを着用し、肌の露出を少なくすること。DEETやイカリジン（虫よけ剤の成分）を含む虫よけスプレーも有効です。
 - ② 屋外活動後はマダニに咬まれていないか確認すること。
 - ③ 吸血中のマダニに気がついた場合、マダニに咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、医療機関を受診すること。
 - ④ 野生動物や飼育している動物に注意すること。

■熊本県でのダニ媒介性疾患の年間発生件数（今回の事例を含む） R5.3.8現在

年	H18～H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	合計
SFTS*	6件	1件	1件	5件	2件	6件	9件	5件	1件	36件
日本紅斑熱	146件	19件	14件	7件	6件	17件	20件	22件	0件	251件
つつが虫病	85件	20件	10件	10件	11件	14件	8件	5件	0件	163件

※SFTSは、平成25年3月4日から届出対象疾病となった。

記録が残っている平成18年以降の死亡例は、日本紅斑熱4件、つつが虫病0件、SFTS7件です（別に、感染症死亡疑い者の遺体からのウイルス検出が1例あり）。

○日本紅斑熱

細菌であるリケッチアに感染することによって引き起こされる病気で、潜伏期間は2～8日、発熱、発疹、刺し口が主要三徴候であり、倦怠感、頭痛を伴います。抗菌薬を投与しません。

○つつが虫病

ダニの仲間であるツツガムシに咬まれることで感染し、5～14日の潜伏期間を経て、典型的な症例では、39℃以上の高熱を伴って発症し、その後数日で体幹部を中心に発疹がみられる。また、患者の多くが倦怠感、頭痛を伴います。治療法は、抗菌薬の投与です。

（お問い合わせ先）

健康危機管理課 感染症対策第二班 担当：大和、槐島

電話：096-333-2240（直通）（内線33143）